

## 出エジプト記32章「金の子牛事件」

### 1A 偶像礼拝に陥る民 1-6

### 2A 滅びを告げ、思い直される神 7-14

#### 1B 民の墮落 7-10

#### 2B 主への嘆願 11-14

### 3A 罪への怒り 15-29

#### 1B さとしの板の破壊 15-20

#### 2B アロンへの叱責 21-24

#### 3B 罪の除去 25-29

### 4A 主への執り成し 30-35

## 本文

出エジプト記 32 章を開いてください、私たちはついに、モーセが 40 日 40 夜、シナイ山の上で主から啓示が与えられ、幕屋の造り方や祭司の装束などの教えを受けて、十の戒めを神ご自身が刻まれた石の板を二枚、モーセが携えて、山を下ろうとしていた時に、なんと彼らが金の子牛を拝むという大罪を犯しました。福音書でも、山から降りて来る時に、悪霊につかれた少年がいても弟子たちが追い出すことができず、不信仰な時代を嘆かれたイエス様の姿がありましたね。山において、主との語らい、栄光の主を眺めるすばらしい時がありますが、地上における現実というものがあります。私たちも、教会や集会で、すばらしい主との時間を持つことが出来たら、その直後に、これまでにない生々しい戦いというものを経験したことがあるかもしれません。

しかも、イスラエルの民は、主と契約を結ぶにあたって、「24:7【主】の言われたことはすべて行います。聞き従います。」と言っていたのです。つまり、主に対しては従順になるということを示している中で起こったことです。ですから、私たちにとって身近な問題であり、いつもは主イエスを信じます、従いますと言っている最中に、こうした、人を躓かせるようなことが起こるのだということです。

### 1A 偶像礼拝に陥る民 1-6

まず、1-6 章にてイスラエルの民が一気に墮落する姿を見ます。そこから私たちは、偶像礼拝に陥る問題について、詳しく見ていくことができます。

1 民はモーセが山から一向に下りて来ようとしないのを見て、アロンのもとに集まり、彼に言った。「さあ、われわれに先立って行く神々を、われわれのために造ってほしい。われわれをエジプトの地から導き上った、あのモーセという者がどうなったのか、分からないから。」

モーセが彼らのところからいなくなってから、かなり時間が経っています。彼らが見ている光景は、「24:17 【主】の栄光の現れは、イスラエルの子らの目には、山の頂を焼き尽くす火のようであった。」というものです。けれども、驚くべき光景もずっと見ていれば慣れてしまいます。したがって、彼らは「神がおられる」という意識が薄くなっていたと考えられます。以前、イスラエルの民がレフィディムで、飲む水がないので「神がここにおられるのか、どうか」と言って、神を試したことがありましたね。それと同じことがここで起こっています。

「神への意識が薄くなっている」というのが、彼らの偶像崇拜の始まりでした。私たちはたえず、目に見える神々を拝んでいる世に生きているため、この誘惑を受けています。詩篇 115 篇に、こう書いてあります。「115:2 なぜ国々は言うのか。「彼らの神はいったいどこにいるのか」と。」とあります。目に見えない神なので、「なぜ目に見えない神など信じているのか？」と挑戦を与え、刺激を与えています。けれども、彼らの神々が目に見えます。ですから、短絡的に神がいると意識することができます。

ですから根本の問題は、「主がおられることを意識できていなかった。」ということでもあります。使徒パウロは、「I テサ 5:17 絶えず祈りなさい。」と勧めましたね。祈り始めることは、主がおられることを意識する時です。そしてダビデは詩篇の中でこう歌いました。「詩篇 16:8-9 私はいつも【主】を前にしています。主が私の右におられるので私は揺るがされることがありません。それゆえ私の心は喜び私の胸は喜びにあふれます。私の身も安らかに住みます。」主を自分の前に置く、ゆえに主が自分の右におられて、いつも力となってくださる。

そして、時間が経っていたということが、意識できなくなった理由の一つです。ほぼ四十日経っていても、生活に変わりはなく、変化の兆しもないからです。けれども、どんなに遅いと感じるようであっても、神は約束を故意に遅らせておられる方ではありません。ペテロは、イエス様の再臨の約束について、「II ペテ 3:9 主は、ある人たちが遅れていると思っているように、約束したことを遅らせているのではなく、あなたがたに対して忍耐しておられるのです。」と言いました。神は預言者ハバククに対し、ユダの国の状況が悪化の一途を辿っていた時にこう言われました。「2:3 この幻は、定めの時について証言し、終わりについて告げ、偽ってはいない。もし遅くなっても、それを待て。必ず来る。遅れることはない。」遅くなっているように見えても、忍耐して待つのです。

そしてイスラエルの民は、アロンのもとに集まり、こう言いました。「われわれに先立って行く神々を、われわれのために造ってほしい。」私たちが神によって造られたのに、かえって自分たちが神を造る、という過ちを犯しました。これから先に出て行くのに、もはや生ける神ではなく、自分たちで出て行くという間違いを犯したのです。

彼らは、主が自分たちをエジプトから連れ出した、ということを知っていました。「20:2 わたしは、

あなたをエジプトの地、奴隷の家から導き出したあなたの神、【主】である。」主がシナイ山まで連れてきてくださったことを彼らは知っているのですから、シナイ山から約束の地までも主が導いてくださるといふ確信に至らなければいけません。過去に救いを与えられた神は、今も自分を支え、そして将来も自分を救ってくださることを信じなければいけません。主は真実な方だからです。そしてパウロも、後ろのものを忘れ、ひたむきに前に向かって進み、キリストによって召してくださる神の栄冠を得るために走っているのです、と言いましたね(ピリ 3:13-14)。

ところが、彼らは過去を持ち出しました。牛は、エジプトにおいてアピス神と呼ばれる神でした。エジプトで世界遺産に指定されているメンフィスの墓地遺跡群には、地下に巨大な棺桶がいくつも見つかっています。それがアピスの牛を葬ったものです。そしてアピスはミイラにもされていました。彼らは、この過去をなつかしく思い出して、アロンにこの神を造らせたのです。私たちは、過去をずっと引きずっていたいと願います。そして、その遺物を残しておきたいと願います。クリスチャンの場合、過去の神が強く働いてくださったその良い思い出にしがみつきたいと思って、それが偶像になってしまう場合もあります。また、昔の肉の行いにまた戻ってってしまうのです。

そして民は、「あのモーセという者がどうなったのか、分からないから。」と言っています。自分の指導者がいなくなったことによって、神ご自身を捨てたという過ちを犯しました。自分自身が神についているという、神との直接の関係が希薄だったことを示しています。イスラエルのその後の歴史の中で、士師の時代があります。約束の地に入って、ヨシュアが死んだ後に、イスラエルの民は周囲の民の拜んでいる神々に自分たちも仕えるようになりました。それで主が、敵が彼らを苦しめることを許されたことによって、彼らは主に叫び求めます。すると主は、敵に対して戦ってイスラエルを救い出す士師をイスラエルに遣わされます。それでイスラエルは救われるのですが、その士師が活着している間は、イスラエルは神に仕えていました。けれども士師が死ぬと、彼らは再び偶像崇拜に陥るのです。つまり彼らは、生ける神との、生ける関係を、士師らに丸投げしていたのです。士師が神に対して祈ってくれるだろう、神に代わって私たちに治めてくれるだろう、と、士師に依頼していたのです。

2 それでアロンは彼らに言った。「あなたがたの妻や、息子、娘たちの耳にある金の耳輪を外して、私のところに持って来なさい。」3 民はみな、その耳にある金の耳輪を外して、アロンのところに持って来た。4 彼はそれを彼らの手から受け取ると、のみで鑄型を造り、それを鑄物の子牛にした。彼らは言った。「イスラエルよ、これがあなたをエジプトの地から導き上った、あなたの神々だ。」5 アロンはこれを見て、その前に祭壇を築いた。そして、アロンは呼びかけて言った。「明日は【主】への祭りである。」6 彼らは翌朝早く全焼のささげ物を献げ、交わりのいけにえを供えた。そして民は、座っては食べたり飲んだりし、立っては戯れた。

そして次の問題はアロンでした。アロンはモーセによって、民をさばくように命じられていました。

けれども、実際は民がアロンに要求を突き付けていたのです。1 節に戻ると、日本語で読むと願っているように聞こえますが、そうではありません、アロンに詰め寄って強く要求しているのです。それで、アロンは彼らを神の支配で治めるのではなく、彼らの要求に応じる形で金の子牛を造ることから、彼らが祭りをするところまで導いてしまったのです。4 節を見てください、「彼らは言った。」となっているのです。民が主導権を握り、アロンがそれに仕えているという状態です。

しかし、神の支配の中で、民主主義は存在しません。私たちが感じていること、思っていることを優先させたら、必ずや偶像崇拜の罪を私たちは犯します。教会においては、民主制ではなく神政政治です。キリストをかしらとする体が教会です。この方が命じられることが絶対であり、それに従うのであり、私たちの意見を実現するところではありません。だから、私たちはまず祈らなければいけません。そして御言葉がすべての決定の基準になっていなければいけません。

そして、驚くべきことに、アロンが民の要求に応じて行ったことは、イスラエルの神、ヤハウェを完全に捨てたのではないことです。むしろ、かしらを主なる神から子牛に替えただけで、その他はすべて同じでありました。代替物です。初めに、「その耳にある金の耳輪を外して、アロンのところに持って来た。」と言っています。覚えていますか、主はモーセに、金銀や撚糸など、心から進んでささげる人から奉納物を受け取らなければならない、と言われました(25:1)。さらに見てください「祭壇」を造っています。主は、土の祭壇、また石の祭壇を造りなさい、と命じられたし、また青銅の祭壇を幕屋の中に置くことを命じられました。確かに祭壇は同じなのですが、だれに捧げているかが全く違うのです。そして恐ろしいのが、アロンの呼びかけです。「明日は【主】への祭りである。」アロンは、牛を拝みなさいと言っていません。主を、ヤハウェを拝みなさい、と言っているのです。ただ、イスラエル人がエジプトにいた時に慣れ親しんでいた牛の形をしているだけで、対象が主であればそれでよいと考えました。そしてイスラエルの民は、「翌朝早く」起きて、「全焼のささげ物を献げ、交わりのいけにえを供えた。」とあります。実にすばらしい献身です。ところが、対象が金の子牛なのです！そして、「民は、座っては食べたり飲んだりし」とあります。これも長老たちがモーセに引き連れられて、主の足元で飲み食いしたので、とても似ています。

ですから、「似て非なる」ものなのです。私たちは、表面的な行為だけを見て、「なんてすばらしいのだろう。なんて献身的なのだろう。これこそ、イエス・キリストへの礼拝だ。」と思うかもしれませんが。けれども、それは対象がまったく異なる偶像崇拜にしかすぎず、単に「イエス」という名前を使っているだけにしか過ぎないことがあるのです。ですから、私たちはイエス・キリストではなく、代替物を拝むという危険があります。

そして、偶像崇拜なのか、主なる神なのかははっきりしているのは、その実です。6 節を見てください、彼らが飲み食いしたあと、「立っては戯れた」とあります。この戯れたは、性的な乱れを意味する言葉です。つまり、お祭り騒ぎをして、性的に、道徳的に乱れている、ということです。肉の

行ないが、彼らの神を如実に表しています。イエス様は、「実によって、偽預言者を見分けることができる。」と言われました。そして、使徒パウロも、肉の行ないと聖霊の実を比べています。「Ⅰコリ 6:9-10 あなたがたは知らないのですか。正しくない者は神の国を相続できません。思い違いをしてはいけません。淫らな行いをする者、偶像を拝む者、姦淫をする者、男娼となる者、男色をする者、盗む者、貪欲な者、酒におぼれる者、そしる者、奪い取る者はみな、神の国を相続することができません。」

## **2A 滅びを告げ、思い直される神 7-14**

### **1B 民の墮落 7-10**

7【主】はモーセに言われた。「さあ、下りて行け。あなたがエジプトの地から連れ上ったあなたの民は、墮落してしまった。8 彼らは早くも、わたしが彼らに命じた道から外れてしまった。彼らは自分たちのために鑄物の子牛を造り、それを伏し拝み、それにいけにえを献げ、『イスラエルよ、これがあなたをエジプトの地から導き上った、あなたの神々だ』と言っている。」

主は、モーセに対してご自分の失望を隠せませんでした。イスラエルの民を「わたしの民」と呼ばず、「**あなたの民**」と言われています。ご自分の民と呼ぶべき親密さがなくなってしまったのです。そして、「**墮落してしまった**」と言われますが、この言葉はノアの時代に人々が悪の道に進んだ時に、「**創 6:12 神が地をご覧になると、見よ、それは墮落していた。すべての肉なるものが、地上で自分の道を乱していたからである。**」と同じ言葉を使っておられます。水による裁きに匹敵する悪を行なってしまったのです。

9【主】はまた、モーセに言われた。「わたしはこの民を見た。これは実に、うなじを固くする民だ。10 今は、わたしに任せよ。わたしの怒りが彼らに向かって燃え上がり、わたしが彼らを絶ち滅ぼすためだ。しかし、わたしはあなたを大いなる国民とする。」

「うなじを固くする民」という言い回しは、これからも出てきます。これは馬の乗り手が、手綱で馬を引いても、全然言うことをきかず、動かない状態のことを指しています。そして、ノアの時に行なわれたように、彼ら全てを断ち滅ぼすとも言われます。そして神は、また改めてアブラハムと同じことを、モーセを通して行なうと言われます。アブラハムに、「**あなたを大いなる国民にする**」と約束されました(創世 12:2)。

### **2B 主への嘆願 11-14**

11 しかしモーセは、自分の神、【主】に嘆願して言った。「【主】よ。あなたが偉大な力と力強い御手をもって、エジプトの地から導き出されたご自分の民に向かって、どうして御怒りを燃やされるのですか。12 どうしてエジプト人に、『神は、彼らを山地で殺し、地の面から絶ち滅ぼすために、悪意をもって彼らを連れ出したのだ』と言わせてよいのでしょうか。どうか、あなたの燃える怒りを収め、

ご自身の民へのわざわいを思い直してください。13 あなたのしもべアブラハム、イサク、イスラエルを思い起こしてください。あなたはご自分にかけて彼らに誓い、そして彼らに、『わたしはあなたがたの子孫を空の星のように増し加え、わたしが約束したこの地すべてをあなたがたの子孫に与え、彼らは永久にこれをゆずりとして受け継ぐ』と言われました。」

モーセによる、すばらしい執り成しです。彼は、神からの申し出を受け取ることもできました。自分のことだけを考えたら大いなる国民になると言われた約束は実に魅力的です。けれども、モーセは愛がありました。ちょうど羊飼いが百匹のうち一匹がいなくなって、九十九匹を残して一匹を捜すように、愛は自分の命を注ぎだします。損得勘定をしたり、計算しません。彼は、神の民と苦しみを共にすることが、キリストの栄光だと思っていました(ヘブル 11:26)。イエス様もそうでしたね、ご自分が十字架に付けられて、祭司長などが彼を罵っている時に、「ルカ 23:34 父よ、彼らをお赦しください。彼らは、自分が何をしているのかが分かっていないのです。」と言われました。

モーセは初めに、7 節で主が「あなたの民」と彼に言われたことに反応しました。自分の民ではなく、神ご自身の民です。そして彼らは単に、神が創造されたということだけでなく、偉大な力と力強い御手をもって贖い出された民です。次にモーセは、神の名がそしられることを訴えました。エジプト人がイスラエルのせいであれだけ大変な思いをしたのですが、「えっ、金の子牛を拝んで滅ぼされた？何だよ、それは！神なんて言っているけど、変な奴だな。」と言われるに決まっています。そして、アブラハム、イサク、ヤコブに対する神の約束を覚えてください、と嘆願しています。

したがって、第一に「神の贖い」、第二に「神の御名」、第三に「神の約束」に訴えて、彼らを滅ぼさないでくださいとお願いしているのです。一切、イスラエルの民の正しさを訴えていません。神の義に訴えているのです。これが、神の御心にそった祈りです。私たちが人の魂の救いのために祈る時に、それはその人のため以上に、キリストがその人を愛しておられる、ご自分の命を捨てられたほどに愛しておられる、神の心に訴えるのです。そしてキリスト者として、同じように罪に陥っている時に、キリストが私たちを愛しておられるがゆえに、執り成して祈るのです。

14 すると【主】は、その民に下すと言ったわざわいを思い直された。

ここに、しっかりとした説明が必要な神の動作があります。「思い直された」という言葉です。まずヘブル語ですが、「憐れみから、気の毒に思うこと」「不憫になる」という意味がある言葉です。気まぐれで、思い直したのではありません。サムエル記第一に「15:29 実に、イスラエルの栄光である方は、偽ることもなく、悔やむこともない。この方は人間ではないので、悔やむことがない。」とあります。ヤコブ 1 章 17 節には、「父には、移り変わりや、天体の運行によって生じる影のようなものはありません。」とあります。

神は、ご自分の義のゆえに、イスラエルの民を罰しなければいけません。けれども、それを決して喜んでおられないということを決して忘れてはいけません。聖書の中に、何かを滅ぼす、誰かを滅ぼすと神が宣言されている時に、その者がへりくだり、自分のしたことを悔いて、神に立ち返ろうとしているのであれば、「わたしはこうする。」と言われたことをすぐに控えられます。なぜか？これが34章で主がモーセにご自分の名の栄光をお示しになりますが、「34:6【主】は彼の前を通り過ぎるとき、こう宣言された。『【主】、【主】は、あわれみ深く、情け深い神。怒るのに遅く、恵みとまことに富み、恵みを千代まで保ち、咎と背きと罪を赦す。』とあるからです。またエゼキエルは預言しました。「18:23 わたしは悪しき者の死を喜ぶだろうか——【神】である主のことば——。彼がその生き方から立ち返って生きることを喜ばないだろうか。」神は罪を罰せずにはおかない方ですが、情け深く、憐れみに富み、怒るに遅い方なのです。

ですから、モーセが祈っていることは、実は神の心から発したことでした。モーセは執り成しの祈りにおいて、神の御心と一つになっていました。彼の祈りを通して、神はご自分の思いを実現されました。もちろんモーセは、自分が神を演じているなどと少しも思っていません。彼はただ、神の前でへりくだり、嘆願しているだけです。けれども、そうした嘆願へと導かれたのは神であり、モーセの祈りによってご自分の思いを戻すことを行なっておられるのです。御霊が、私たちの祈りの中で助けてくださることをパウロは話しています。「ロマ 8:26-27 同じように御霊も、弱い私たちを助けてくださいます。私たちは、何をどう祈ったらよいか分からないのですが、御霊ご自身が、ことばにならないうめきをもって、とりなしてくださるのです。人間の心を探る方は、御霊の思いが何であるかを知っておられます。なぜなら、御霊は神のみこころにしたがって、聖徒たちのためにとりなしてくださるからです。」祈りを通して、私たちの思いが神の思いになります。私たちは知らずとも、神が私たちにご自分の思いを置かれています。そしてその祈りを聞かれることによって、神はご自分の御心を行なわれます。このようにして、祈り手は神の御業のただ中に入る恵みを受けるのです。

### **3A 罪への怒り 15-29**

#### **1B さとの板の破壊 15-20**

15 モーセは向きを変え、山から下りた。彼の手には二枚のさとの板があった。板は両面に、すなわち表と裏に書かれていた。16 その板は神の作であった。その筆跡は神の筆跡で、その板に刻まれていた。

二枚の板に、主ご自身の筆跡で書かれています。これは、稀に見る場合で、聖書はほとんどが、人の手を通して、主に導かれて書かれたものです。イスラム教は、コーランは天においてアッラーが直接、書いたと言われていますが、私たちは、書かれている物が靈感を受けているのであり、欠けのある不完全な人間が書いても、主の御霊が導かれて、その書いている言葉が神のものとなっている、ということです。けれどもこの場合は、主ご自身の筆跡です。

17 ヨシュアは民の叫ぶ大声を聞いて、モーセに言った。「宿営の中に戦の声があります。」18 モーセは言った。「あれは勝利を叫ぶ声でも敗北を嘆く声でもない。私が聞くのは歌いさわぐ声である。」19 宿営に近づいて、子牛と踊りを見るなり、モーセの怒りは燃え上がった。そして、手にしていたあの板を投げ捨て、それらを山のふもとで砕いた。20 それから、彼らが造った子牛を取って火で焼き、さらにそれを粉々に砕いて水の上にまき散らし、イスラエルの子らに飲ませた。

ヨシュアはモーセが山に上るときに、同行していましたね。モーセが神と話しているのを彼は少し離れたところで待っていました。そして彼は声を聞いていました。彼はすぐれた戦士ですから、この声を戦いの声と聞き間違ったのです。けれども、それはどんちゃん騒ぎの声でした。

モーセは石の板を砕きました。これは、イスラエルの民が神の戒めをことごとく破ったことを示す行動でした。そして子牛を火で焼き、粉々に砕き、水の上にまき散らしたのは、この偶像に対する記憶を二度と抱かせないためです。聖書では、偶像を破壊する時に、例えばそこに死体をばらまいたり、または公衆便所にした人もいました。こうして二度と偶像崇拝を行なわせないようにします。それから、その粉入り水をイスラエルに飲ませます。彼らがどのようなとんでもないことを行なったのか、その苦さを味わわせるためです。これを聖書では「懲らしめ」と言います。自分が行った罪の結果を自分で味わうようにさせることを言います。私たちは懲らしめを受ける時、悲しみますが、長期的には義と平和の実を結ばせることができます。自ら、この罪を二度と犯したくないという、健全な罪への憎しみと嫌悪感を抱くことができる効果があります。

## 2B アロンへの叱責 21-24

21 モーセはアロンに言った。「この民はあなたに何をしたのですか。あなたが彼らの上にこのような大きな罪をもたらすとは。」22 アロンは言った。「わが主よ、どうか怒りを燃やさないでください。あなた自身、この民が悪に染まっているのをよくご存じのはずです。23 彼らは私に言いました。『われわれに先立って行く神々を、われわれのために造ってほしい。われわれをエジプトの地から連れ上った、あのモーセという者がどうなったのか、分からないから。』24 それで私は彼らに『だれでも金を持っている者は、それを取り外せ』と言いました。彼らはそれを私に渡したので、私がこれを火に投げ入れたところ、この子牛が出て来たのです。」

とんでもないことをアロンは言っています。火の中に入れたら、子牛が出てきた、奇跡が起こったと話しているのです。もちろん、先に見たように彼自身がのみで鑄型を造って、子牛を造ったのです。なぜ、そんなあからさまな嘘をついたかといえば、恐れから言ったことでしょう。申命記には、神はアロンをも滅ぼそうとされたが、モーセが執り成したので彼は死なないで済んだ、ということが書いてあります(9:20)。アダムとエバがそうですが、「なぜ実を食べたのか？」と神に聞かれたときに、自分の責任ではなく、他者のせいになりました。アロンはそのことをここで行なっています。

### 3B 罪の除去 25-29

25 モーセは、民が乱れていて、アロンが彼らを放っておいたので、敵の笑いものとなっているのを見た。

この「敵」はアマレク人でしょうか。神の民が、神の共同体が敵の物笑いとなっているということは、危機的な状況です。そこでモーセは、取らなければいけない処置を取りました。

26 そこでモーセは宿営の入り口に立って、「だれでも【主】につく者は私のところに来なさい」と言った。すると、レビ族がみな彼のところに集まった。27 そこで、モーセは彼らに言った。「イスラエルの神、【主】はこう言われる。各自腰に剣を帯びよ。宿営の中を入り口から入り口へ行き巡り、各自、自分の兄弟、自分の友、自分の隣人を殺せ。」28 レビ族はモーセのことばどおりに行った。その日、民のうちの約三千人が倒れた。29 モーセは言った。「あなたがたは各自、その子、その兄弟に逆らっても、今日、【主】に身を献げた。主があなたがたに、今日、祝福を与えてくださるように。」

ここには、神の聖さがかかっています。主の共同体の中に聖さがなくなれば、共同体全体が崩壊します。そこで、このように厳しい処置をしなければいけなくなりました。これが旧約時代だけの話だと思わないでください。霊的には同じ原則が教会にもあります。ペテロの前で、偽善の罪を犯したアナニヤとサツピラは息絶えました。彼らは、全ての財産を持って来たと言って、本当は一部しか持って来ていなかったのに偽ったのです。また、コリントにある教会では、近親相姦をしている者がいました。その罪を裁くことをせず、教会は寛容と言う名目で放っておいたので、使徒パウロはその男を教会から追放する処置を取りました。時に、罪を取り除くことをしなければいけません。

そしてモーセは、「あなたがたは各自、その子、その兄弟に逆らっても、今日、【主】に身を献げた。」と言っています。私たちは同族や仲間への愛が、主への愛に先行してしまう過ちを犯します。けれども主への愛が第一とならなければいけません。「マタイ 10:37 わたしよりも父や母を愛する者は、わたしにふさわしい者ではありません。わたしよりも息子や娘を愛する者は、わたしにふさわしい者ではありません。」時には自分の身を切り裂くような辛さを味わうことでしょう。けれども、それは主のためだけでなく、私たち一人一人に益になることです。

### 4A 主への執り成し 30-35

30 翌日になって、モーセは民に言った。「あなたがたは大きな罪を犯した。だから今、私は【主】のところへ上って行く。もしかすると、あなたがたの罪のために宥めをすることができるかもしれない。」31 そこでモーセは【主】のところに戻って言った。「ああ、この民は大きな罪を犯しました。自分たちのために金の神を造ったのです。32 今、もしあなたが彼らの罪を赦してくださるなら——。しかし、もし、かなわないなら、どうかあなたがお書きになった書物から私の名を消し去ってください

い。」

モーセは民の前では毅然とした態度を取りましたが、彼の心は神の前では弱くなっていました。これが彼のイスラエルの民に対する心です。そしてモーセは驚くべき祈りを捧げています。「どうかあなたがお書きになった書物から私の名を消し去ってください。」この言葉を発する前に、逡巡している彼の思いを読み取ることができます。前文の文末が棒線になっていますね。彼が言葉にならない思いで、詰まっているのです。

そして、「あなたがお書きになった書物」とありますが、神は私たちの名を書き記している書物を持っておられます。弟子たち 70 人がイエス様の名によって悪霊を追い出したことを喜んでいながら、主も共に喜ばれましたが、「ルカ 10:20 しかし、霊どもがあなたがたに服従することを喜ぶのではなく、あなたがたの名が天に書き記されていることを喜びなさい。」そして、イエス様はサルデスにある教会で一部の者は、「黙示 3:5 勝利を得る者は、このように白い衣を着せられる。またわたしは、その者の名をいのちの書から決して消しはしない。わたしはその名を、わたしの父の御前と御使いたちの前で言い表す。」とされています。

ですからモーセが行っていることは、言わば、「彼らが天国に入るためなら、私を代わりに地獄に送ってください。」と言っているのに等しいです。使徒パウロは同胞のユダヤ人に対して、同じ思いを言いました。「ロマ 9:3 私は、自分の兄弟たち、肉による自分の同胞のためなら、私自身がキリストから引き離されて、のろわれた者となってもよいとさえ思っています。」ここまで熾烈な愛をもっています。

33 【主】はモーセに言われた。「わたしの前に罪ある者はだれであれ、わたしの書物から消し去る。34 しかし、今は行って、わたしがあなたに告げた場所に民を導け。見よ、わたしの使いがあなたの前を行く。だが、わたしが報いる日に、わたしは彼らの上にその罪の報いをする。」35 こうして【主】は民を打たれた。彼らが子牛を造ったからである。それはアロンが造ったのであった。

主は裁くべき人々を裁かれました。先ほど三千人が死にました。そして、約束の地に入る前に 20 歳以上の者たちはみな、荒野で死に絶えます。そして、「わたしの使いがあなたの前を行く」と言われて、ご自身は行かないことを後で語られます。このことについては、モーセが共に行ってくださいと強く嘆願します。

金の子牛の罪をこうしてモーセはまとめています。「アロンが造った子牛」と書き記していますね。アロンはモーセに代わって民を治めなければいけなかったのに、それを怠りました。民が欲しているもの、願っているものをそのまま追従して行いました。これは、仕えることではありません。真の奉仕は、人々を神の義の中に導くことです。そのために労苦し、骨折ることです。